文部省著作教科書

中等國語

二

（1）

文部省

廣島縣立第一中學校

50569
教科書文庫
5
810
45-1948
01304
49815

中等國語

二

文部省

(1)

廣島大学 廣師附中圖書館
P.T.A.
分類番号
昭和 年 月 日受入

中央図書館

広島大学図書
0130449815

目錄

一　早春……一
二　やさしいことばで……二
三　短歌と俳句……五
四　文章について……十四
五　わがはいはねこである……十九
六　一門の花……三十二
七　舞へ〳〵かたつむり……三十六
八　カバチニッポ……三十九

一　早　春

もっと明かるく、
大きく飛べよみそさゞい。
地に沿うて鳴いて行く、
おくびょうなみそさゞい。

つながれた子うしの目に、
うめの花が映っている。
手を触れてみる短い角に、
かすかなぬくみが、
遠くから來るもののあしおとが。

五寸ばかりの麦の上、
水のかれた水車小屋のほとり、
もっと明かるく、

大きく飛べよみそさざい。

（木下夕爾の作による）

二　やさしいことばで

友だちどうしでありながら、お互に、離れ〳〵になり、なかが悪くなり、時には、争いごとを起したりすることがある。これには、いろ〳〵な原因があろうが、その一つは、お互の心持がよく通じていなかったということにある。お互の心がよくわかっていれば、そのくいちがいがなくなり、離れようと思っても、離れることができなくなり、親しくなるはずである。氣持がうまく通じない大きなわけは、お互の使うことばが相手によく通じないためである。どこか、ことばにわからないところがあり、ひとりよがりのことを言ったりするために、相手方に通じかねてみぞができて來る。私どもは、友だちどうしはいうまでもなく、だれとでもなかよく親しみあわなければならない。近所の人たちとも、村じゅうの人たちとも、町じゅうの人たちとも、みんななかよくしようではないか。

日本じゅうの人が、みんな親しくなって、心から許しあうようになったら、どんなに明かるい國になるであろう。そのような時になって、はじめて世界の國のなかま入りをすることができる。みんなとなかよくするためには、まず、わかりよいことばを使うことである。話をする時にも、できるだけ、やさしいことばを考え、ものを書く時にも平易なことばを用いるということがたいせつになって來る。みんなが、この氣になれば、日常のことばも、だん〳〵とわかりやすくなって行くにちがいない。

たとえ学問上の話をする時でも、なるべくやさしくくだいて、一般の人たちにもわかるように、心がけて行きたいものである。科学のことでも、宗教のことでも、哲学のことでも、そんなにむずかしい世界ではないはずである。人間の考えた世界、人間の作っている世界ではないか。人にわかるように話せないことはないはずである。学問上には術語があり、技術上にはまた特殊のことばもあろう。それらのことばをどうしても使わなければ言えない時にはやむをえないが、それにしても、そのことばの前後を、いっそうわかりやすいものにして、おのずから、その術語なり特殊のことばなりの意味がわかるように心を用いれば、決して理解しにくいことはあるまい。深い知識や、こみいった学理や、深いさとりの境地を話す時でも、適切な例を用いるとか、おもしろいたとえを使うとかして、聞き手にわかるように巧みに言い表わしたいものである。

その道の研究者どうしでなければわからないというのでは、せっかくのそのことばのねうちも半減するであろう。医学の話は、医学者だけがわかり、美術のことは、美術家だけがわかり、経済の話は、経済学者だけがわかるというのでは、貴重な研究の発表も、その効果は狹い範囲にとどまるばかりでなく、医学界・藝術界・経済界などがばら〳〵に分かれてしまうことになろう。そうではなく、どの社会のことでも、どの職業のことでも、どんな思想のことでも、理解しあうことができれば、みんな同じように高より、結びつくことができる。音樂家も、建築家も、実業家も、政治家も、労働者も、宗教家も、男も女も、うちとけあって、なかのいい親しいあいだがらとなるであろう。

さて、そのわかりやすいことばとは、どんなことばであろう。

第一の條件としては、文字に書いてみてはじめてわかるようなことばではなく、耳で聞いてもすぐ

わかるようなものでなくてはならない。

第二には、話す時には適当なところでくぎり、長く続けないことである。長く続けると、前後の関係がこみいったり、不明になったりしがちだからである。

第三には、ものをはっきりと言って、あいまいなぼんやりしたことは、避けられるだけ避けることである。はっきりしたことを言うためには、まず心がはっきりしていなければならない。ぼんやりしている心は、どのように話してみたところで、やはり相手にはぼんやりとしかわからない。

それから、言おうとする自分のことばを、できるだけくだいて話すことである。ことばというものは、一口にまとめて言おうとすれば、いくらでもおゝまかに言えるものであるが、またその逆に、こまかにくだこうと思えば、それもできないことはない。

以上は話をすることについて言ったのであるが、文章を書く時にも、これとほゞ同じことが言える。文章には、書く人の音声が現われないから、それだけ読み手には受け取りにくい。また文章には、身振りも表情も直接に附いていないから、それも読み手の方でさがしつゝ、感じつゝ、受け取って行かなければならない。このように、文章は話よりもわかりにくいところを持っているから、書く時には、いっそう氣をつけなければならない。

よく言われることだが、ある文豪は、自分の文章にわからないところがあれば、そこを何度も書きなおしたということである。

文章を一生の仕事とした、天才と呼ばれる人でさえ、このような苦労をし、やさしく書こうと努力したのである。まして私どもは、たとえどんな文章を書く時でも、もっともっと文章をわかりやすくすることに関心を深めなければならない。

とかく、青年時代には、文章をむずかしく書きたがるものである。観念的なことばを並べたり、誇張した表現を好んだりして、ひとりよがりになりがちである。好むにまかせて書きなぐるようなことなく、相手の氣持を考え、静かに筆を運び、思いを写し取るという心がけは、いつでも持ちたいものである。とはいうものの、わが心の絵を写し取ることは、やさしいようで実はむずかしいことである。そこで文を練るという努力がどうしても必要となって來る。

しかし、わかりやすいことばでものを言い、ものを書くということは、低俗にすることではない。また、幼稚にすることでもない。むしろ、やさしいことばの中に、深い思想なり、豊かな感情なりをもることである。

空を流れる白い雲は、いずこの、いずれの人にも、白い雲となながめられながら、しかも、その中には美しさが十分にこめられている。いずこの、いずれの人にも理解されながら、その中に無限の意味が藏されるようなことばをつゞることができたら、どんなにたのしい生活がひらけて行くことであろう。

三　短歌と俳句

歌ごころ

歌が作りたいという氣持がして、さて作る手づるを得るに苦しむ場合がある。その時には、手帳をふところにして戸外に出るがよい。作りたいという一種の醗酵（はっこう）した氣持の時、目に触れるものは、た

いてい作歌の材料となりうるものである。昔の歌などでは、「なんの歌を作る。」ということがまず問題であったようだが、新しい歌では、「なんの」ということはほとんど問題にならぬ。卽ち材料はなんでもよい、たゞ作る人の心それ自身が問題となるのである。「なんの歌」は問題ではないが、「どう詠むか。」「どんなに詠むか。」が問題である。詠む態度と詠む技巧とが主となっているのである。それで、詠みたいという心がきざしている時には、あまり材料にえり好みをしていないで、まずその詠みたい心を滿足させるまで、手当たり次第に作るがよい。門を出るときりの木がある。そのきりの白い幹を詠むもよい。きりの根もとには大きな新しい枯れ葉が落ちている。その落ち葉を詠むもよい。その落ち葉のかげには白い草花が咲いている。それも十分歌になる。花のかげの地は、かすかなしめりを帶びて、朝の日影を受けている。それもよければ、その地の上をはっている小さな名もない虫、その虫を追っているありというように、心のまゝに詠み進むべきである。何を詠んでよいかわからないといって苦しむのは愚である。詠みたいという心が出れば、――それはなか〳〵貴重な心である。――その心の消えないうちに、なんでもまず詠むべきである。室内でもたいていの材料には事欠かぬものであるが、もし室内にいてその材料に困ったら、前に述べたように、室外に出かけるがよい。そして靜かに目の前のものに心をとめて、一首一首と詠むがよい。

また、その詠みたいという心をさそい出すべき必要のある時もある。卽ち、その下地はあっても、なだはっきりと詠みたいとまで心のまとまらない時がある。そんな時にも、私はこの「戸外に出でよ。」と「写生」とをすゝめる。まず、「ものを靜かに見よ。」と、私は言いたい。門に続くすぎがきの若芽、そのそばに立って靜かにそれを見つめていよ。心は次第に洗われて來るに相違ない。疲れた心にはかすかな活氣を感じはじめ、にぶい心には次第に感觸が生じ、見る目を通して、心は知らず知らず新鮮になって來るものである。そうして、とらえどころのなかった、まとまりのなかった心に、次第にまとまりがついて來る。心の目があいて來る。そこで、「詠もう。」と思い立ってみれば、たいていは、できるものである。私が「ものを靜かに見よ。」というのは、いわば一つの精神集中の法である。單にこうして心をまとめるためばかりでなく、一歩進んで、目で見るまゝを一首にまとめようとつとめてみよ。そうしてできたのが、必ずしもいい歌だとは言えまいが、ものを見る目を養うために、見たまゝを歌に詠む練習をするために、はじめはそうするのがよいと思う。

歌というと、たいそうむずかしいもののように考えて固くなる癖があるが、それはいけない。平らかに、靜かに、常にその心を澄ませておいて、目の前の草にでも、小鳥にでも、おもむろにものを言いかける氣持で作れば、やす〳〵と作れるものだ。「氣を変える。」「心を新しくする。」ということは、作歌の上にはたいせつなことである。机に向かって考えうんだ際など、ぶらりと戸外に出てつめたい風に吹かれると、さきに頭の痛くなるほど考えこんだ時には、どうしてもできなかった微妙な歌が、ほとんど無意識に心に浮かぶことなどもある。何か用事のある時など、急いで道を歩きながら、あとからあとからと歌のできることもある。で、歌ごころのある人は、ちょっと出るにも、手帳に鉛筆を放さないがよい。ひょっと心に浮かんですぐ消えて行くような歌に、なか〳〵捨てがたい佳作がある。歌は、そのうたわれた材料や趣向よりも、そのことば、その調子が常にたいせつなものであるから、ひょっと心に浮かんで消えるという歌などを、そのできた時々に何かに記しておかないと、はじめ自然に心からもれて來た微妙な調子を、すぐ逃がしてしまいがちのものである。こういう趣向の歌であ

つたがと、その歌の筋をあらまし覚えていても、それは多くは役に立たない。筋だけでは、最初心に浮かんだ時の微妙な心持がなか〳〵出ない。その心持は、たいていことばや調子の上に含まれているからである。散歩の時に限らず、夜床についてから、思いがけず歌のできることなどもある。そんな時には、すぐ起きあがって紙筆を用意すべきである。明朝起きてからなどと考えていては、たいてい失敗する。

散歩はまずひとりの方がよい。雑念をのぞいておもむろに歩く。歩くにつれて心は次第に統一されて來る。そうした時、はじめは少し無理でも、一首二首、眼前の物をなんでも材料として詠んでみるがよい。はじめ、その一、二首の間は一向おもしろくなくても、そうして続けているうちには、われ知らず感興がわいて、いつか本氣になって作られるものである。散歩ごとに必ずそうとは行くまいが、多くはそうなりやすい。いつのまにか、またそうした癖もつくものである。はじめはつとめてやってみなくてはだめかも知れないが、とにかく実地にやってみるがよい。

旅行は散歩の大なるものである。汽車の窓、汽船の室、またはぶら〳〵と山を越えながら、次第に移り行く大きな景色を目にしていると、つとめずとも作りたくなるのが当然であろうが、そうでなくても、前に言ったように、最初二、三首しいて作ってみると、自然にそれにさそわれて作りたくなって來るであろう。また絵はがきや手紙の端などに、なんの氣なしに書きつけて出した歌に、きわめて自然なよい作を見ることもある。

散歩にせよ、旅行にせよ、あまりに心を騒がせてはいけない。あまりに思いたかぶってはいけない。自然にわきあがって來る感興をも、つとめて押さえるようにして、静かに一首二首と詠んで行くべきである。作者自身あまりに興奮してしまうと、できる歌はきわめて粗雑な概念的なものになりがちなものである。どうかすると、いても立ってもいられないような興奮を覚えることがある。私もおりおりそういう場合に出あった。ある時は、宿屋の二階で、じっとすわって手帳に歌を書きつけていられないで、立ちあがってへやじゅうをそろ〳〵と歩き出したけれども、つとめて自分みずからの興奮をかみ味わうような氣持で、やゝ遠くにおいてながめるような氣持で、さわるのも恐ろしいようにしてその感興を守りながら、三首五首と作って行った。ある時は、秩父の奥の谷間を歩きながら、これは三日間にわたって続いた感興を守りながら、詠みふけったこともある。こんなにして歌ができ出すと、自分ながらこう〳〵しい氣に満たされて、自分自身のこともなか〳〵かりそめにはあつかいえないものである。昔のことばに、「歌人は、いながらにして名所を知る。」というのがある。これは、すぐれた歌人は、直覚でまだ見ぬ遠い地の景色をも知ることができるというふうにも解せられるが、事実はそうでなく、概念でその景色を想像し、そしてそれを歌に詠みうるということに当たるらしい。はなはだよくないことばである。世に名所とうたわれているような風景を、概念でうたおうとしたところで、とうていできるものではない。やはり実地に見て、実際に感じたところをうたわなくてはならぬ。

また初心の人は、なんでも大げさにうたわなくてはならないものと考える傾きがある。これは歌というとすぐ固くなるのとほゞ同じで、景色の歌を詠むとすれば、絶景・佳景でなくてはならぬように思う癖である。これもたいへんまちがっている。前にも言ったように、歌に詠む材料は問題でなく、常に作者の心が問題であるのだ。作者の心がよく澄んで、よく張っておれば、即ち十分に感動が発しておればよいのである。だから、感動もなくて、しいてこしらえた富士山の歌よりも、十分な感動をも

って詠んだ名もない丘の歌の方によいのがあるのである。景色がよいのに心を動かされたから、よい歌ができたというのならば当然だが、景色のよい所が詠んであるからよい歌だということは決してない。心すべきことである。

（若山牧水の文による）

俳句への道

俳句はたいへんむずかしいものだと考えている人があるようであります。反対にまた、俳句なんか作ろうと思えば造作はないと軽く考えている人もあるようであります。いずれにも理由があることであります。しかし、これから俳句を始めてみたいという人に対して、俳句はむずかしいものだと言ってしまったのでは、せっかくの機縁を取りはずすことになります。私はこう申したい。「俳句の門はだれにでもはいれる門であります。学問がなかろうが、また、女、子供であろうが、年配の人であろうが、だれにでもくぐれる門であります。はじからずに、とんと一つ、とびらをたゝいてごらんなさい。」と。

こゝで一つ、俳句はどんなに無造作にでもできるものであるという実例を示しましょう。私がこの原稿を書いているきょうは、朝から一日、つめたい秋雨が降っています。ペンをおいて顔をあげると、やぶのような庭には、雑草や雑木が雨にぬれて輝いています。こんな貧しい小さい庭をながめながら、今すぐにでも、俳句はできないことはありません。

雨多きことしの秋のはぎの花
はぎもはや盛りすぎゆく雨つゞき

ことしは夏のころからとかく雨がちで、十月も半ばとなるのに、ほんとうに秋晴れらしい日はまだ幾日もなかったようであります。そのためかどうか、庭のはぎも成績がよくありません。葉は早くもよごれ、花は乏しいようであります。そのはぎに、きょうもまた雨が降っていて、枝も葉もぐったりとしおれています。花はおおかた散りました。雨はあすまでも続きそうです。そういうありのまゝを十七字にしたのが、この二句であります。傍点を附けたのは季題であります。どの句にも、一つは季題があります。そうして、みな五、七、五と畳んで、十七字で一句を成しています。このように、なんでも自分の感じたまゝの正直な氣持を、季題に託して、十七字で述べさえすれば俳句になるのであります。

私は今、かりに庭の景色、即ち自然を見たのでありますが、目を室内に轉じて、身辺座右を見ても同じことであります。私はあわせ（秋あわせ）を着ております。違いだなの上に、もう用いなくなったうちわ（秋うちわ）がまだのっています。お勝手には到來のまつだけのかごがあります。近所のお祭（秋祭）で、軒にさす造花の枝が雨で取り入れてあります。このあいだまでつってあったすだれ（秋すだれ）は、張りかえた障子（障子張る）に変わっています。かやもつらなくなりました（かやの別れ）――といったようなわけで、われ〳〵の生活も、自然というものに影響されていろ〳〵に変わり、数多くの季題を作っているのであります。そのどれをでもとらえて、氣持のまゝに十七字を並べてみることです。もちろん、はじめから人にほめられる句ばかりはできないでありましょう。しかし、たくさん作っている間には、必ず先輩から、これはおもしろい、これは的に当たっていると言われる句ができます。そのたびごとに、少しずつ目の前が明かるくなって行きます。こうして、自分でも知

らぬまに進歩して行くのであります。

以下少しく実作上について述べてみましょう。

コスモスや夕焼けて來ぬ沼の家

農家かあるいは茶店かも知れない沼べの一軒の家の庭に、コスモスが咲き乱れている。沼に夕日が落ちかゝって、空のあかねが水の面を染め、コスモス咲く一軒家をもまっかにいろどりはじめた。そういう句意で、着眼点はこれでよいのでありますが、一つ重大な表現上のあやまちを犯しています。それはいわゆる二段切れのことで、一度「や」で切れた後、再び「ぬ」で切れていることであります。一句を朗唱してみて、どこかまとまらぬ感じがするのは、そのためであります。これを、

コスモスや夕焼けて來し沼の家

とすると、たちまち整然とした姿になります。たゞ、一字の違いでありますが、第二節が「ぬ」でいったん切れると切れないとで、一句の生死が分かれてしまうのであります。

かな〳〵やゝ湖上やうやく暮れにけり

この句も前の句と同じく、二つの切れ字を併用しているのが欠点で、そのあやまちは、いわゆる「や」「かな」を併用すべからずというのと同じことであります。そこでこれを、

かな〳〵に湖上やうやく暮れにけり

とするのも、一つの添削であります。ひぐらしが鳴きしきり、まのあたり、湖の面があおぐろい暮色に包まれて行く景色と感じを、しっくりとまとまって受け取ることだけには、これでも一應さしつかえありません。しかし幾度も舌頭にのぼせていると、これではまだ、「に」で、ひぐらしの声と湖上の薄暮とを結んだところに、何か力の弱さを感じます。湖上ということばも少し固いように感じられます。そこでこれを、

かな〳〵ややうやく暮るる湖（うみ）の面

とします。こうすると、「に」のぜいじゃく性も救われ、また、「湖の面」ということばのひゞきの柔らかさも、「湖上」よりは立ちまさっていて、この場合の氣持にしっくりするようであります。

朝涼し晝は暑かり法師ぜみ

法師ぜみが鳴くのは暦の秋のはじめであります。残暑はきびしいが、朝晩はさすがに涼しいといった時分であります。この句は、その季節感が詩因になっていることはうなずけるのでありますが、いかにも敍法が練れていません。「朝涼し」と出しておいて、第二節で、わざともう一度「――暑し」と対句的に切るのも、一つの敍法ではありますが、そういう敍法に從うならば、どちらも「し」でそろえて形の美しさを期するのが常道でありましょう。それをこの句は、音数の関係で「暑かり」としているのは、いかにも窮しています。そこで、全く構成を改めて、

朝のまは少し涼しく法師ぜみ

とすると、調べもやゝとゝのい、晝間は暑いということもことばのうちに自然に出て、くどい感じもなくなり、しかも、作者の言いたいことは完全に出ております。切れ字は、涼しくの下に、「なりぬ」が省略されているわけであります。

（富安風生の文による）

四　文章について

私は、文章に実用的と藝術的との区別はないと思います。文章の要は何かといえば、自分の心の中にあること、自分の言いたいと思うことを、できるだけその通りに、かつ、めいりょうに傳えることにあるのでありまして、手紙を書くにも小説を書くにも、別段それ以外の書きようはありません。昔は「華を去り実に就く」のが文章の本旨だとされたことがありますが、それはどういうことかといえば、よけいなかざりけを除いて、実際に必要なことばだけで書く、ということであります。そうしてみれば、最も実用的なものが、最もすぐれた文章であります。

明治時代には、実用に遠い美文体という一種の文体がありまして、きそってむずかしい漢語をつらね、語調のよい、きれいな文字を使って、景を敍したり情をのべたりすることがはやりました。

明治時代の美文というものは、太平記などの文体から脈を引き、その言いまわしを学んだものでありました。その時分は、小学校の作文でも、こういう漢語を苦心してさがし出したり、寄せ集めたりするけいこをしたもので、天長節の祝辞だとか、卒業式の答辞だとか、観櫻の記だとかいう文章は、みなこの文体でつゞったのでありますが、昔は知らず、現代の人間には、これではあまりに裝飾が勝ちすぎて、自分の思想や感情を表現するのに不便であります。ですから、その後この文体は次第にほろんでしまいましたが、実用的でない文章といえば、まずこういうふうなものよりほかに考えることができません。

こゝでちょっとおことわりしておきますが、文章というものを二つに分けて、韻文と散文とに区別することがあります。韻文とは何かといえば、詩や歌のことでありまして、これは人間が心の中にあることを他に傳達するのみでなく、みずから詠嘆の情をこめてうたうように作ったもの、したがってうたいやすいように字の数や音の数を定め、その規則にあてはめてつゞるのでありますから、なるほど文章の一種ではありますけれども、普通の文章とは多少目的が違うだけに、それはそれとして、特別な発達をとげております。で、実用的でなくてしかも藝術的な文章というものがあるとすれば、この韻文がまさしくそれにあたりますけれど、私がこれから説こうとするものは、韻文でない文章、即ち散文のことであります。

そこで、韻文でない文章だけについて言えば、実用的と藝術的との区別はありません。藝術的な目的で作られる文章も、実用的に書いた方が効果があります。昔は口でしゃべることをそのまゝに書かず、文章の時は口語と違った言い方をしまして、ことばづかいなども、民間の俗語を用いては礼に欠けていると思い、わざと実際に遠くするように修飾を加えた時代がありますので、あの美文のようなものが役に立ったこともありますけれども、今日はそういう時代でない。現代の人は、どんなにきれいな、音調のうるわしい文字を並べられても、実際の理解が伴なわなければ、美しいと感じない。礼儀ということも、全然重んじないのではないが、高尚優美な文句を聞かされたからといって、それを礼儀とは受け取らない。第一、われ〳〵の心のはたらきでも、生活の狀態でも、外界の事物でも、昔に比べればずっと変化が多くなり、内容が豊富に、精密になっておりますから、字引をあさって、昔の人が使いふるしたことばを引っぱって來たところで、現代の思想や感情や社会の出來事にはあてはまら

ない。それで、実際のことが理解されるように書こうとすれば、なるべく口語に近い文体を用いるようにし、俗語でも、新語でも、ある場合には外國語でも、なんでも使うようにしなければならない。つまり、韻文や美文では、わからせるということ以外に、目で見て美しいことと、耳で聞いてこゝろよいこととが同様に必要な條件でありましたが、現代の口語文では、專ら、「わからせる。」「理解させる。」ということに重きをおく。他の二つの條件も備わっていればいるに越したことはありませんけれども、それにこだわっていてはまに合わない。実に現代の世相はそれほど複雜になっているのであります。

文章をもって表わす藝術は小説でありますが、しかし藝術というものは生活を離れて存在するものではなく、ある意味では何よりも生活と密接な関係があるのでありますから、小説に使う文章こそ、最も実際に卽したものでなければなりません。もしみなさんが、小説には何か特別な言い方や書き方があるとお思いになるのでしたら、試みに現代の小説をどれでもよいから読んでごらんなさい。小説に使う文章で、他のいわゆる実用に役立たない文章はなく、実用に使う文章で、小説に役立たないものはないということが、じきおわかりになるのであります。次に小説の文章の例として志賀直哉氏の「城の崎にて」の一節を引用してみましょう。

自分のへやは二階で隣のない、わりに静かな座敷だった。読み書きにつかれるとよく縁のいすに出た。わきが玄関の屋根で、それが家へ接続する所が羽目になっている。その羽目の中に、はちの巣があるらしい。虎斑の大きなふとったはちが、天氣さえよければ、朝から暮れ近くまで毎日いそがしそうに働いていた。はちは羽目のあわいからすり抜けて出ると、ひとまず玄関の屋根におりた。そこで羽や触角を前足や後足でていねいに調べると、少し歩きまわるやつもあるが、すぐ細長い羽二枚方へしっかりと張ってぶうんと飛び立つ。飛び立つと急に早くなって飛んで行く。植えこみのやつでの花がちょうど満開で、はちはそれにむらがっていた。自分はたいくつするとよくらんかんからはちの出入りをながめていた。

ある朝のこと、自分は一匹のはちが玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。足は腹の下にちぢこまって、触角はだらしなく顔へたれさがってしまった。他のはちは一向冷淡だった。巣の出入りにいそがしくそのわきをはいまわるが、全くこうでいする様子はなかった。いそがしく立ち働いているはちは、いかにも生きているものという感じを與えた。そのわきに一匹、朝も晝も夕も、見るたびに一つ所に全く動かずに、うつ向きにころがっているのを見ると、それがまたいかにも死んだものという感じを與えるのだ。それは三日ほどそのまゝになっていた。それは見ていていかにも静かな感じを與えた。さびしかった。他のはちがみな巣にはいってしまった日暮れ、つめたいかわらの上に一つ残った死がいを見ることはさびしかった。しかし、それはいかにも静かだった。

故芥川龍之介氏は、この「城の崎にて」を志賀氏の作品中の最もすぐれたものの一つに数えていましたが、こういう文章は、実用的でないということができましょうか。こゝには温泉へ湯治に來ている人間が、宿の二階からはちの死がいの様子とが描かれているのですが、それが簡單なことばで、はっきりと表わされています。ところで、こういうふうに簡單なことばで、めいりょうに物を描き出すぎりょうが、実用の文章においても同様にたいせつなのであります。この文章の中には、何もむずかしいことばや言いまわしは使ってない。普通にわれ〳〵が日記をつけ

たり、手紙を書いたりする時と同じ文句、同じ言い方である。それでいてこの作者は、まことにこまかいところまで写し取っている。私が点を打った部分を読むと、一匹のはちの動作をしさいに観察して、ほんとうに見た通りを書いていることがわかる。そうして、その書いてあることが、というのは、この場合には、はちの動作でありますが、それがはっきりと読者に傳わるのは、できるだけむだを切り捨てて、不必要なことばを省いてあるからであります。例えば、終りの方の「それは見ていていかにも静かな感じを與えた。」の次に、いきなり「さびしかった。」と入れてありますが、「自分は」というような主格を置かずに、たゞ「さびしかった。」とあるのが、よくきいています。またその次の「他のはちがみな巣にはいってしまった日暮れ、つめたいかわらの上に一つ残った死がいを見ることは、しかじか。」のところも、普通なら、「日が暮れると、他のはちはみな巣にはいってしまって、その死がいだけがつめたいかわらの上に一つ残っていたが、それを見ると、」というふうに書きそうなところですが、こんなふうに短く引きしめ、しかも引きしめたためにいっそう印象がはっきりするように書けている。「華を去り実に就く」とはこういう書き方のことであって、簡にして要を得ているのですから、このくらい実用的な文章はありません。されば、最も実用的に書くということが、即ち藝術的の手腕を要するところなので、これがなか〳〵容易にできるわざではないのであります。

たゞし、今の志賀氏の文章を見ると、「さびしかった。」ということばが二度、「静かな」という形容詞が二度、くり返し使ってありますが、このくり返しは静かさやさびしさを出すために有効な手段でありまして、決してむだではないのであります。こういう技巧こそ藝術的と言えますけれども、しかし、それとても、やはり実用の目的に背馳（はいち）するものではありません。実用文においても、こういう技巧があればあった方がよいのであります。

実用実用と言いますけれども、今日の実用文は、廣告・宣傳・通信・報道、その他種々なるパンフレット等に應用の範囲が廣く、それらは、多少とも藝術的であることを必要とするのでありまして、用途の上から言いましても、だん〳〵藝術と実用との区別がわからなくなって來つゝあります。現に裁判所の調書などは、最も藝術に縁の遠かるべき記録でありますが、犯罪の狀況や時所についてずいぶん精密な筆を費やし、被告や原告の心理狀態にまで立ち入って述べておりまして、時には小説以上の感をもよおさしめることがあります。されば、文章の才を備えることは、今後いかなる職業においても要求されるわけでありまして、かた〳〵心得のためにこれだけのことをわきまえておいていたゞく方がよいと思います。

（谷崎潤一郎の文による）

五　わがはいはねこである

わがはいはねこである。名まえはまだない。

どこで生まれたか、とんと見当がつかぬ。なんでもうす暗いじめ〳〵した所で、にゃあにゃあ泣いていたことだけは記憶している。わがはいは、こゝではじめて人間というものを見た。しかもあとで聞くと、それは書生という人間ちゅうで一番獰惡（どうあく）な種族であったそうだ。この書生というのは、時々われ〳〵をつかまえて煮て食うという話である。しかし、その当時はなんという考えもなかったから、

別段恐ろしいとも思わなかった。たゞかれのてのひらにのせられて、すうと持ちあげられた時、なんだかふわ〳〵した感じがあったばかりである。てのひらの上で、少し落ち着いて書生の顔を見たのが、いわゆる人間というものの見はじめであろう。この時、妙なものだと思った感じが今でも残っている。第一、毛をもって装飾さるべきはずの顔が、つる〳〵してまるでやかんだ。その後、ねこにもだいぶん会ったが、こんなかたわには一度も出くわしたことがない。のみならず、顔のまんなかがあまりに突起している。そうしてその穴の中から、時々ぷう〳〵と煙を吹く。どうもむせっぽくて実に弱った。これが人間ののむたばこというものであることは、ようやくこのごろ知った。

この書生のてのひらのうちで、しばらくはよい心持にすわっておったが、しばらくすると、非常な速力で運轉しはじめた。書生が動くのか、自分だけが動くのかわからないが、むやみに目がまわる。胸が悪くなる。とうてい助からないと思っていると、どさりと音がして目から火が出た。それまでは記憶しているが、あとはなんのことやら、いくら考え出そうとしてもわからない。

ふと氣がついてみると、書生はいない。たくさんおった兄弟が一匹も見えぬ。かんじんの母親さえ姿を隠してしまった。その上、今までの所とは違ってむやみに明かるい。目をあいていられぬくらいだ。はてな、なんでも様子がおかしいと、のそ〳〵はい出してみると非常に痛い。わがはいは、わらの上から急にさゝ原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いでさゝ原をはい出すと、向こうに大きな池がある。わがはいは池の前にすわって、どうしたらよかろうと考えてみた。別にこれという分別も出ない。しばらくして、泣いたら書生がまた迎えに來てくれるかと考えついた。にゃあにゃあと試みにやってみたが、だれも來ない。そのうち、池の上をさら〳〵と風が渡って日が暮れかゝる。腹が非常にへって來た。泣きたくても声が出ない。しかたがない、なんでもよいから、食物のある所まで歩こうと決心をして、そろりそろりと池を左にまわりはじめた。どうも非常に苦しい。そこをがまんして無理やりにはって行くと、ようやくのことで、なんとなく人間臭い所へ出た。こゝへはいったらどうにかなると思って、竹がきの崩れた穴から、とある邸内にもぐりこんだ。縁は不思議なもので、もしこの竹がきが破れていなかったなら、わがはいはついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹のかげとはよく言ったものだ。このかきねの穴は、今日にいたるまで、わがはいが隣の三毛を訪問する時の通路になっている。さて邸へは忍びこんだものの、これから先どうしていいかわからない。そのうちに暗くなる、腹はへる、寒さは寒し、雨が降って來るという始末で、もう一刻も猶予ができなくなった。しかたがないから、とにかく明かるくて暖かそうな方へ〳〵と歩いて行く。今から考えると、その時はすでに家の内にはいっていたのだ。こゝでわがはいは、かの書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に会ったのがおさんである。これは前の書生よりいっそう乱暴な方で、わがはいを見るやいなや、いきなり首筋をつかんでおもてへほうり出した。いやこれはだめだと思ったから、目をつぶって、運を天にまかせていた。しかし、ひもじいのと寒いのにはどうしてもがまんができん。わがはいは再びおさんのすきを見て台所へはいあがった。するとまもなくまた投げ出された。わがはいは投げ出されてははいあがり、はいあがっては投げ出され、なんでも同じことを四、五へんくり返したのを記憶している。その時に、おさんというものはつく〳〵いやになった。このあいだ、おさんのさんまを盗んで、この返報をしてやってから、やっと胸のつかえがおりた。わがはいが最後につまみ出されようとした時に、このうち

の主人が、「そう〳〵しい、なんだ。」と言いながら出て來た。女中はわがはいをぶらさげて主人の方へ向けて、「この宿なしの小ねこが、いくら出しても出しても、お台所へあがって來て困ります。」と言う。主人は鼻の下の黒い毛をひねりながら、わがはいの顔をしばらくながめておったが、やがて、「そんならうちへ置いてやれ。」と言ったまゝ奥へはいってしまった。主人はあまり口をきかぬ人と見えた。女中はくやしそうにわがはいを台所へほうり出した。かくして、わがはいはついにこのうちを自分のすみかときめることにしたのである。

わがはいの主人は、めったにわがはいと顔を合わせることがない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると、終日書斎にはいったきりほとんど出て來ることがない。うちのものはたいへんな勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際は、うちのものが言うような勤勉家ではない。わがはいは時々忍び足にかれの書斎をのぞいてみるが、かれはよく昼寝をしていることがある。時々読みかけてある本の上によだれをたらしている。かれは胃弱で、皮膚の色が淡黄色を帯びて、弾力のないふかっぱつな徴候を現わしている。そのくせに大飯を食う。大飯を食ったあとでタカジアスターゼを飲む。飲んだあとで書物をひろげる。二、三ページ読むと眠くなる。よだれを本の上へたらす。これがかれの毎夜くり返す日課である。わがはいはねこながら時々考えることがある。教師というものは、実にらくなものだ。人間と生まれたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら、ねこにでもできぬことはないと。それでも、主人に言わせると、教師ほどつらいものはないそうで、かれは友だちが來るたびに、なんとかかんとか不平を鳴らしている。

わがはいはこのうちへ住みこんだ当時は、主人以外のものには、はなはだ不人望であった。どこへ行ってもはねつけられて、相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日にいたるまで名まえさえつけてくれないのでもわかる。わがはいはしかたがないから、できうる限り、わがはいを入れてくれた主人のそばにいることをつとめた。朝、主人が新聞を読む時は、必ずかれのひざの上に乗る。かれが昼寝をする時は、必ずその背中に乗る。これはあながち主人がすきというわけではないが、別にかまい手がなかったから、やむをえんのである。その後いろ〳〵経験の上、朝はめしびつの上、夜はこたつの上、天氣のよい昼は縁側へ寝ることとした。しかし一番心持のいいのは、夜に入って、こゝのうちの子供の寝床へもぐりこんで、いっしょに寝ることである。この子供というのは五つと三つで、夜になるとふたりが一つ床へはいってひと間へ寝る。わがはいはいつでも、かれらの中間におのれをいるべき余地を見出だして、どうにかこうにか割りこむのであるが、運悪く子供のひとりが目を覚ますが最後、たいへんなことになる。子供は――ことに小さい方がたちが悪い――「ねこが來た、ねこが來た。」と言って、夜なかでもなんでも大きな声で泣き出すのである。すると、例の神経胃弱性の主人は、必ず目を覚まして次のへやから飛び出して來る。現にせんだってなどは、物差でしりっぺたをひどくたゝかれた。

わがはいは人間と同居してかれらを観察すればするほど、かれらはわがまゝなものだと断言せざるをえないようになった。ことに、わがはいが時々いっしょに寝る子供のごときにいたっては言語道断である。自分の勝手な時は、ひとを逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、ほうり出したり、へっついの中へ押しこんだりする。しかもわがはいの方で少しでも手出しをしようものなら、家内総がかりで追いまわして迫害を加える。このあいだも、ちょっと疊でつめをといだら、細君が非常におこって、それか

ら容易に座敷へ入れない。台所の板の間でひとがふるえていても、一向平氣なものである。わがはいの尊敬する筋向こうの白君などは、会うたびごとに、「人間ほど不人情なものはない。」と言っていられる。白君は先日、玉のような子ねこを四匹生まれたのである。ところが、そこのうちの書生が、三日めにそいつを裏の池へ持って行って、四匹ながら棄てて來たそうだ。白君は涙を流して、その一部始終を話した上、どうしてもわれらねこ族が、親子の愛を全うして、美しい家族的生活をするには、人間と戰って、これを剿滅せねばならぬと言われた。一々もっともの議論と思う。また、隣の三毛君などは、人間が所有權ということを解していないと言って、大いに憤慨している。元來われ〳〵同族間では、めざしの頭でもぼらのへそでも、一番先に見つけたものがこれを食う權利があるものとなっている。もし、相手がこの規約を守らなければ、腕力に訴えてよいくらいのものだ。しかるに、かれら人間は毫もこの觀念がないと見えて、われらが見つけたごちそうは、必ずかれらのためにりゃくだつせらるるのである。かれらはその強力を賴んで、正当にわれらが食いうべきものを奪ってすましている。白君は軍人のうちにおり、三毛君は代言の主人を持っている。わがはいは教師のうちに住んでいるだけ、こんなことに関すると、両君よりもむしろ樂天である。たゞその日その日が、どうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも栄えることもあるまい。まあ氣を長くねこの時節を待つがよかろう。

わがまゝで思い出したから、ちょっとわがはいのうちの主人が、このわがまゝで失敗した話をしよう。元來この主人は、なんといって人にすぐれてできることもないが、なんにでもよく手を出したがる。俳句をやって「ほとゝぎす」へ投書をしたり、新体詩を「明星」へ出したり、まちがいだらけの英文を書いたり、時によると弓にこったり、謠を習ったり、また、ある時はバイオリンなどをぶう〳〵鳴らしたりするが、氣の毒なことには、どれもこれもものになっておらん。そのくせやり出すと、胃弱のくせにいやに熱心だ。後架の中で謠をうたって、近所で後架先生とあだ名をつけられているにも関せず、一向平氣なもので、やはり、「これは平の宗盛にて候。」をくり返している。みんなが「そら宗盛だ。」と吹き出すくらいである。この主人がどういう考えになったものか、わがはいの住みこんでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みをさげてあわたゞしく帰って來た。何を買って來たのかと思うと、水彩絵の具と毛筆とワットマンという紙で、きょうから謠や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果たして翌日から当分の間というものは、毎日毎日書斎で晝寢もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかきあげたものを見ると、何をかいたものやらだれにも鑑定がつかない。当人もあまりうまくないと思ったものか、ある日、その友人で美学とかをやっている人が來た時に、次のような話をしているのを聞いた。「どうもうまくかけないものだね。人のを見るとなんでもないようだが、みずから筆をとってみると、いまさらのようにむずかしく感ずる。」これは主人の述懐である。なるほどいつわりのないところだ。かれの友は、金縁のめがね越しに主人の顔を見ながら、「そうはじめからじょうずにはかけないさ。第一室内の想像ばかりで絵がかけるわけのものではない。昔イタリアの大家アンドレア＝デル＝サルトが言ったことがある。『絵をかくなら、なんでも自然そのものを写せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに鳥あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然はこれ一幅の大活画なり。』と。どうだ、きみも絵らしい絵をかこうと思うなら、ちと写生をしたら。」「へえ、アンドレア＝デル＝サルトがそんなことを言ったことがあるかい。ちっとも知らなかった。なる

ほどこりやもっともだ。実にその通りだ。」と主人はむやみに感心している。金縁のうらにはあざけるような笑いが見えた。

その翌日、わがはいは例のごとく縁側に出て心持よく晝寢をしていたら、主人が例になく書斎から出て來て、わがはいのうしろで何かしきりにやっている。ふと目が覚めて、何をしているかと一分ばかり細目に目をあけて見ると、かれは余念もなくアンドレア＝デル＝サルトをきめこんでいる。わがはいはこのありさまを見て、覚えず失笑するのを禁じえなかった。かれはかれの友に揶揄せられたる結果として、まず手はじめにわがはいを写生しつゝあるのである。わがはいはすでに十分寢た。あくびがしたくてたまらない。しかし、せっかく主人が熱心に筆をとっているのを、動いては氣の毒だと思ってじっとしんぼうしておった。かれは今わがはいのりんかくをかきあげて、顔のあたりをいろどっている。わがはいは自白する。わがはいはねことして決して上乘のできではない。せいといい、毛並みといい、顔の造作といい、あえて他のねこにまさるとは決して思っておらん。しかし、いくら不器量のわがはいでも、今わがはいの主人に描き出されつゝあるような妙な姿とは、どうしても思われない。第一色が違う。わがはいはペルシア産のねこのごとく、黄を含める淡灰色に、うるしのごとき斑入りの皮膚を有している。これだけは、だれが見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに、今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければとび色でもない。さればとて、これらをまぜた色でもない。たゞ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上、不思議なことは目がない。もっとも、これは寢ているところを写生したのだから無理もないが、目らしいところさえ見えないから、めくらねこだか、寢ているねこだかはっきりしないのである。わがはいは、心中ひそかに、いくらアンドレア＝デル＝サルトでも、これではしようがないと思った。しかし、その熱心には感服せざるをえない。なるべくなら動かずにおってやりたいと思ったが、さっきから小便がもよおしている。みうちの筋肉はむず〳〵する。もはや一分も猶予ができぬ仕儀となったから、やむをえず失敬して両足を前へ存分のして、首を低く押し出して、「あゝあ」と大なるあくびをした。さてこうなってみると、もうおとなしくしていてもしかたがない。どうせ主人の予定はぶちこわしたのだから、ついでに裏へ行って用をたそうと思って、のそ〳〵はい出した。すると、主人は失望と怒りをかきまぜたような声をして、座敷の中から、「このばか野郎。」とどなった。この主人は人をのゝしる時は、必ずばか野郎というのが癖である。ほかに悪口の言いようを知らないのだからしかたがないが、今までしんぼうしたひとの氣も知らないで、むやみにばか野郎呼ばわりは失敬だと思う。それも、へいぜいわがはいがかれの背中へ乘る時に、少しはいい顔でもするなら、この漫罵も甘んじて受けるが、こっちの便利になることは、何一つこゝろよくしてくれたこともないのに、小便に立ったのをばか野郎とはひどい。元來人間というものは、自己の力量に慢じてみんな増長している。少し人間より強いものが出て來ていじめてやらなくては、この先どこまで増長するかわからない。

わがまゝもこのくらいならがまんするが、わがはいは人間の不徳について、これよりも数倍悲しむべき報道を耳にしたことがある。

わがはいの家の裏に、十坪ばかりの茶園がある。廣くはないがさっぱりとした、心持よく日の当たる所だ。うちの子供があまり騒いでら〳〵晝寢のできない時や、あまり退屈で腹かげんのよくないおりなどは、わがはいはいつでもこゝへ出て浩然の氣を養うのが例である。ある小春のおだやかな日

の二時ごろであったが、わがはいは晝飯後こゝろよく一睡した後、運動かた〳〵この茶園へと歩を運ばせた。茶の木の根を一本一本かぎながら、西側のすぎがきのそばまで來ると、枯れぎくを押し倒して、その上に大きなねこが前後不覚に寢ている。かれはわがはいの近づくのも一向心づかざるごとく、また心づくもむとんじゃくなるごとく、大きないびきをして、なが〳〵とからだを横たえて眠っている。ひとの庭内に忍び入りたるものが、かくまで平氣に眠られるものかと、わがはいは、ひそかにその大胆なるどきょうに驚かざるをえなかった。かれは純粹の黑ねこである。わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線をかれの皮膚の上になげかけて、きら〳〵するにこ毛の間より、目に見えぬほのおでも燃え出ずるように思われた。かれはねこちゅうの大王ともいうべきほどの偉大なる体格を有している。わがはいの倍は確かにある。わがはいは暎賞の念と好奇の心に前後を忘れて、かれの前に佇立して余念もなくながめていると、靜かなる小春の風が、すぎがきの上から出でたるあおぎりの枝を軽くさそって、ばら〳〵と二、三枚の葉が枯れぎくの茂みに落ちた。大王はかっとそのまんまるの目を開いた。今でも記憶している。その目は、人間の珍重する琥珀というものよりも、はるかに美しく輝いていた。かれは身動きもしない。双眸の奥から射るごとき光を、わがはいの矮小なるひたいの上に集めて、「おめえは一体なんだ。」と言った。大王にしては、少々ことばがいやしいと思ったが、何しろその声の底にいぬをもひしぐべき力がこもっているので、わがはいは少なからず恐れをいだいた。しかしあいさつをしないとけんのんだと思ったから、「わがはいはねこである。名まえはまだない。」と、なるべく平氣をよそおって冷然と答えた。しかし、この時わがはいの心臓は、確かに平時よりもはげしく鼓動しておった。かれは大いにけいべつせる調子で、「なに、ねこだ。ねこが聞いてあきれらあ。ぜんてえどこに住んでるんだ。」ずいぶん傍若無人である。「わがはいはこゝの教師のうちにいるのだ。」「どうせそんなことだろうと思った。いやにやせてるじゃねえか。」と、大王だけにきえんを吹きかける。ことばつきから察すると、どうも良家のねことも思われない。しかし、そのあぶらぎって肥満しているところを見ると、ごちそうを食っているらしい。豊かに暮らしているらしい。わがはいは「そういうきみは一体だれだい。」と聞かざるをえなかった。「おりゃ車屋の黑よ。」昂然たるものだ。車屋の黑は、この近辺で知らぬ者なき乱暴ねこである。しかし、強いばかりでちっとも教育がないから、あまりだれも交際しない。同盟敬遠主義の的になっているやつだ。わがはいはかれの名を聞いて、少々しりこそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々軽侮の念も生じたのである。わがはいは、まず、かれをためしてみようと思って、左の問答をしてみた。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう。」

「車屋の方が強いにきまっていらあな。おめえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ。」

「きみも車屋のねこだけにだいぶん強そうだ。車屋にいるとごちそうが食えると見えるね。」

「なあに、おれなんざ、どこの國へ行ったって食い物に不自由はしねえつもりだ。おめえなんかも茶ばたけばかりぐる〳〵まわっていねえで、ちっとおれのあとへくっついて來てみねえ。一月たたねえうちに見ちげえるようにふとれるぜ。」

「追ってそう願うことにしよう。しかし、うちは教師の方が車屋より大きいのに住んでいるように思われる。」

「べらぼうめ、うちなんかいくら大きくたって腹のたしになるもんか。」

かれは大いにかんしゃくにさわった様子で、寒竹をそいだような耳を、しきりとびくつかせてあらちらかに立ち去った。わがはいが車屋の黒と知己になったのはこれからである。

その後わがはいはたび〳〵黒と邂逅する。邂逅するごとに、かれは車屋相当のきえんを吐く。さきにわがはいが耳にしたという不徳事件も、実は黒から聞いたのである。

ある日、例のごとくわがはいと黒は、暖かい茶ばたけの中で寝ころびながらいろ〳〵雑談をしていると、かれはいつもの自慢話をさも新しそうにくり返したあとで、わがはいに向かって次のごとく質問した。

「おめえは今までにねずみを何匹とったことがある。」知識は黒よりもよほど発達しているつもりだが、腕力と勇氣とにいたっては、とうてい黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、この問に接した時は、さすがにきまりがよくはなかった。けれども、事実は事実でいつわるわけには行かないから、わがはいは、「実はとろうとろうと思ってまだとらない。」と答えた。黒はかれの鼻の先からびんと突っ張っている長いひげをびり〳〵とふるわせて非常に笑った。元來、黒は自慢をするだけにどこかたりないところがあって、かれのきえんを感心したようにのどをころ〳〵鳴らして謹聽していれば、はなはだ御しやすいねこである。わがはいはかれと近づきになってから、すぐにこの呼吸を飲みこんだから、この場合にも、なまじいおのれを弁護してます〳〵形勢を悪くするのも愚である。いっそのこと、かれに自分のてがら話をしゃべらして、お茶を濁すにしくはないと思案をきめた。そこでおとなしく、「きみなどは年が年であるから、だいぶんとったろう。」とそゝのかしてみた。果然、かれは墻壁の欠所にとっかんして來た。「たんとでもねえが、三、四十はとったろう。」とは得意げなるかれの答であった。かれはなお話を続けて、「ねずみの百や二百は、ひとりでいつでも引き受けるが、いたちってえやつは手に合わねえ。一度いたちに向かってひどい目にあった。」「へえ、なるほど。」とあいづちを打つ。黒は大きな目をぱちつかせて言う。「去年の大そうじの時だ。うちのていしゅが、いしばいの袋を持って縁の下へはいこんだらおめえ、大きないたちの野郎がめんくらって飛び出したと思いねえ。」「ふん。」と感心して見せる。「いたちってけども、なあに、ねずみの少し大きいぐれえのものだ。こん畜生って氣で追っかけて、とう〳〵どぶの中へ追いこんだと思いねえ。」「うまくやったね。」とかっさいしてやる。「ところがおめえ、いざってえ段になるとやつめ、最後っぺをこきやがった。くせえのくさくねえのって、それからってえものは、いたちを見ると胸が悪くならあ。」かれはこゝにいたって、あたかも去年の昊氣を今なお感ずるごとく、前足をあげて鼻の頭を二、三べんなでまわした。わがはいも少々氣の毒な感じがする。ちっと景氣を附けてやろうと思って、「しかしねずみなら、きみにはにらまれては百年めだろう。きみはあまりねずみをとるのが名人で、ねずみばかり食うもんだから、そんなにふとって色つやがいいのだろう。」黒のごきげんをとるためのこの質問は、不思議にも反対の結果を呈出した。かれは喟然として大息して言う。「かんげえるとつまらねえ。いくらかせいでねずみをとったって――いってえ人間ほどふてえやつは世の中にいねえぜ。ひとのとったねずみをみんな取りあげやがって、交番へ持って行きやがる。交番じゃだれがとったかわからねえから、そのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちのていしゅなんか、おれのおかげで、もう一円五十銭くらいもうけていやがるくせに、ろくなものを食わせたこともありゃしねえ。おい、人間てもなあ、ていのいいどろぼうだぜ。」さすが無学の黒も、このくらいの理屈はわかるとみえて、すこぶるおこった様子で背中の毛をさかだてている。わ

がはいは少々氣味が惡くなったから、いいかげんにその場をごまかしてうちへ帰った。この時から、わがはいは決してねずみをとるまいと決心した。しかし、黑の子分になってねずみ以外のごちそうをあさって歩くこともしなかった。ごちそうを食うよりも寢ていた方が氣らくでいい。教師のうちにいると、ねこも教師のような性質になると見える。用心しないと今に胃弱になるかも知れない。

（夏目漱石の文による）

六　一門の花

平家物語

故郷の花

薩摩守忠度は、いづくよりか帰られたりけん、さむらひ五騎、童一人、わが身ともに、ひたかぶと七騎とつて返し、五條の三位俊成卿のもとにおはしてみたまへば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度。」と名のりたまへば、「おちうど帰り來たれり。」とて、その内さわぎあへり。薩摩守、急ぎ馬よりとんでおり、みづから高らかに申されけるは、「これは三位殿に申すべきことありて、忠度が参つて候。たとひ門をばあけられずとも、このきはまで立ち寄らせたまへ。申すべきことの候。」と申されたりければ、俊成卿、「その人ならばくるしかるまじ。あけて入れ申せ。」とて、門をあけて対面ありけり。ことの体、なんとなうものあはれなり。

薩摩守申されけるは、「先年申し承りてより後は、ゆめ〳〵疎略を存ぜずとは申しながら、この二、三箇年は京都のさわぎ、國々の乱れ出で來、あまつさへ当家の身の上にまかりなりて候へば、つねに参り寄ることも候はず。一門の運命、今日はや盡きはて候。それにつき候うては、撰集の御沙汰ある べき由承りて候ひしほどに、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうむらうと存じ候ひつるに、かゝる世の乱れ出で來て、その沙汰なく候條、たゞ、一身の嘆きと存じ候。この後、世しづまつて、撰集の御沙汰候はば、これに候卷物の中に、さりぬべき歌候はば、一首なりとも御恩をかうむりて、草のかげにてもうれしと存じ候はば、遠き御守りとこそなりまゐらせ候はんずれ。」とて、日ごろ詠みおかれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百余首書き集められたりける卷物を、今はとてうちたれける時、これを取つて持たれたりけるを、よろひの引き合はせより取り出でて、俊成卿に奉らる。三位これを開きて見たまひて、「かゝる忘れ形見どもを賜はり候上は、ゆめ〳〵疎略を存ずまじう候。さてもたゞ今の御渡りこそ、情も深う、あはれもことにすぐれて、感涙おさへがたうこそ候へ。」とのたまへば、薩摩守、「かばねを野山にさらさばさらせ、うき名を西海の波に流さば流せ、今はうき世に思ひおくことなし。さらばいとま申す。」とて、馬にうち乘り、かぶとの緒をしめて西をさしてぞ歩ませたまふ。三位、後をはるかに見送りて立たれたれば、忠度の声とおぼしくて、「前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲にはす。」と高らかに口ずさみたまへば、俊成卿もいとゞあはれにおぼえて、涙をおさへて入りたまひぬ。

その後、世しづまつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありしありさま、言ひおきしことのは、いまさら思ひ出でてあはれなりけり。くだんの卷物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、「故郷の花」といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、読み人知らずとて入れられたる。

さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山ざくらかな

青山の琵琶

修理大夫経盛の嫡子、皇后宮亮経正は、幼少の時より、仁和寺の御室の御所に童形にてさぶらはれしかば、かゝる怨劇の中にも、君の御名残りきつと思ひ出でまゐらせ、侍五、六騎召し具して仁和寺殿へはせ参り、急ぎ馬よりとんでおり、門をたゝかせ、申し入れられけるは、「一門の運命、今日すでに盡きはて候ひぬ。うき世に思ひおくこととては、だゞ君の御名残りばかりなり。八歳の年この御所へ参りはじめ候うて、十三で元服仕り候ひしまでは、いさゝかあひいたはることの候はんよりほかは、あからさまに御前を立ち去ることも候はず。今日すでに西海千里の波路におもむき候へば、またいづれの日、いづれの時、必ず立ち帰るべしともおぼえぬことこそくちをしう候へ。いま一度御前へ参つて、君をも見まゐらせたう存じ候へども、甲冑をよろひ、弓箭を帶して、あらぬさまなるよそほひにまかりなつて候へば、はゞかり存じ候。」と申されければ、御室あはれに思し召して、「たゞ、その姿を改めずして参れ。」とこそ仰せけれ。

経正その日は、紫地の錦の直垂に萌黄匂ひのよろひ着て、長覆輪の太刀をはき、二十四さいたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓わきにはさみ、かぶとをばぬいで高ひもにかけ、御前の御坪にかしこまる。御室やがて御出あつて、みす高くあげさせ、「これへ、これへ。」と召されければ、経正、大床へこそ参られけれ。供にさぶらふ藤兵衛尉有教を召す。赤地の錦の袋に入れたりける御琵琶を持つて参りたり。経正これをとりついで、御前にさし置き、申されけるは、「先年くだしあづかつて候ひし青山持たせて参つて候。名残りは盡きず存じ候へども、さしものわが朝の重宝を、田舎のちりになさんことのくちをしう候へば、まゐらせおき候。もし、不思議に運命開けて、都へ立ち帰ることも候はば、その時こそ重ねてくだしあづかり候はめ。」と申されたりければ、御室あはれに思し召して、一首の御詠を遊ばいてぞくだされける。

あかずして別るる君が名残りをば後のかたみにつゝみてぞおく

経正、御すゞりくだされて、

呉竹のかけひの水はかはれどもなほすみあかぬ宮のうちかな

さて、経正御前をまかり出でられけるに、数輩の童形・出世者・坊官・侍僧にいたるまで、経正の名残りを惜しみ、たもとにすがり、涙を流し、そでをぬらさぬはなかりけり。中にも経正幼少の時、小師でおはせし大納言法印行慶と申しし、葉室大納言光頼卿の御子なり。あまりに名残りを惜しみまゐらせて、桂川の端までうち送り、それよりいとまこうて帰られけるが、法印泣く〳〵かうぞ思ひ続けたまふ。

あはれなり老い木若木も山ざくらおくれさきだち花はのこらじ

経正の返事に、

旅ごろも夜な〳〵そでをかたしきておもへばわれは遠く行きなむ

さて、巻いて持たせられける赤旗、さつとさし上げたれば、あそここゝにひかへて待ち奉る侍ども、あはやとてはせ集まり、その勢百騎ばかり、むちを上げ、こまを早めて落ち行きけり。

七　舞へ〳〵かたつむり

梁塵祕抄

舞へ〳〵かたつむり

舞へ〳〵かたつむり、舞はぬものならば、うまの子やうしの子にくゑさせてむ、踏みわらせてむ、まことに美しく舞うたらば、花の園まで遊ばせむ。

まつの木かげに立ちよりて、岩もる水をむすぶまに、扇の風も忘られて、夏なき年とぞ思ひぬる。

池の涼しきみぎはには、夏のかげこそなかりけれ、こだかきまつを吹く風の、声も秋とぞ聞えぬる。

遊びをせむとや生まれけむ、たはぶれせむとや生まれけむ、遊ぶ子どもの声聞けば、わが身さへこそゆるがるれ。

日光

一

もろ手そろへて日の光すくふ心ぞあはれなる。

すくへどすくへど日の光、

光りこぼるる、音もなく。

二

光りかゞやく何ものかにぎりしめんとす、日もすがら。

光りかゞやく空中に手をにぎりしめ、また開き。

三

何かおどろき、見まはせど、

かゞやくものは日の光。

ふつともらししため息をわがものぞとは人知らず。

四

光あふるるつたかづら、

ゆりうごかすは日の光。

たゞ日の光、日のしづく。

ひがらとつばき

つばきにひがらが飛んで來た。

あれ、あれ、空見てないている。

七　舞へ〳〵かたつむり

つばきの花がさみなあかい、
重なり重なり咲いている。

ひがらの頭は動いてる。
なく時、なく時、動いてる。

つばきの花がさゆれだした。
花から花へとゆれだした。

花から花へとゆれだせば、
どの葉もどの葉もゆれだした。

枝から枝へと飛び〳〵に、
ひがらはなき〳〵遊んでる。

ひがらはどんなにうれしかろ、
つばきもどんなにうれしかろ。

（北原白秋の作による）

八　カバチェッポ

時　明治十五、六年ごろから明治四十年まで。

所　主として十和田湖畔一帯の地。

山々　初夏のからりと晴れた朝。裏側から見た十和田湖をめぐる、みず〳〵しい新緑の山々の遠景が、スクリーンをなだらかに流れて行く。音樂――ギターによるシューベルトの「ます」の変奏曲。

観湖楼の内部　秋の午後。窓から明かるい日光がさしこむ貞行の居間。貞行が机の横に、カツ子と向かいあってすわっている。貞行の前には、ぶあつい帳簿が開かれたまゝ置いてある。カツ子は小さなそろばんをひざにのせている。ふたりはうつむいて、暗い表情で考えこんでいる。

貞　行　（腕組みをしながらため息まじりに、）どうもなあ弱ったもんだ……。（カツ子はちらと夫の顔を見あげ、すぐまたひざの上に目を落す。）

貞　行　（投げ出すように、）去年の三つ一つにも当たらないんだからひどい。欠損も欠損、たいした欠損だ……。

カツ子　（暗い目で夫を見あげ、）どうしたもんでしょうね、おとうさん……。

貞　行　どうするもこうするも、てんでわけがわからないんだからな……。（重苦しい沈默。）

貞行　（何か心に決したように、）なあ、カツ子。こうなったからは、たゞくよ〳〵してみたってはじまらない話だ。早くなんとか善後策をつけなければならないが、それにしても、とにかくみんなの意見も、ひと通り聞いてみなければなあ。（カツ子、うなずく。）

貞行　じゃ、これからすぐ出かけるから、したくしてくれ。

カツ子　（驚いて、）あれ、今すぐお出かけですって、おとうさん。

貞行　うん。善は急げだ。どうせ出かけるもんなら、早い方がいい。まだ日も高いことだし……。

カツ子　それもそうですね。（と、さっそく立ちあがりかけるが、何か思い出したと見えてまたひざをつき、言いにくそうに、）それからね、おとうさん。東京の貞時のところへ、もう学資を送らなければならないんですけど……。

貞行　（困ったように目をそらし、）うん、そいつがあったな……。（妻の顔を見て、）なあ、カツ子。その方は今の場合、おまえの方でなんとかならないか。わしはとにかく、大急ぎで行って來るからな……。（カツ子、ちょっと思案する。それからあっさりといさぎよく、）

カツ子　えゝ。じゃ、おとうさん、行っていらっしゃい。貞時の方は、わたしがなんとかします。

秋田縣廳の内部　秋田縣廳の應接間。貞行が水産課長亀井惣助と、テーブルをはさんで向かいあっている。

亀井　（氣の毒そうに、）そんなわけなら和井内君。氣の毒だが、せっかくのきみの事業も、当分見こみがないかも知れないよ。

貞行　（落胆の様子で力なく亀井を見て、）はあ……。

亀井　というのはだな。こいという魚は、元來とてもりこうな魚だから、一度あぶない目にあった場所へは、決して二度と近寄らないもんだ。それもあたりまえの小さい池や沼ならとにかく、あんなに廣くて深い十和田のことだ。隠れようと思えば、いくらでも隠れ場所はあるわけだからなあ。

貞行　なあるほど、そういうわけですか。（沈默。）

亀井　ところで和井内君。もしいま〳〵こいの方がだめだとなったら、君は一体どうするつもりだ。

貞行　そのことなんです。そうときまったら、しかたがないから、新しい養鱒でもはじめたらと思いますが、一体どんなもんでしょう、課長さん。

亀井　（うなずいて、）なるほど、その方がかえってりこうかも知れない。ますなら、こいより漁期が長い上に、別に生魚でなければ値が出ないというわけのもんじゃなし、事業としても、この方がずっとやりいいわけだ。それにますには、ちょうど十和田ぐらいの水温や水質が、一番いいんだからな……。

和井内本邸　毛馬内の和井内邸の座敷。治郎右衛門と貞行。

貞行　そういうわけで、その道の専門家の意見もよく聞いた上で、いよ〳〵新しい養鱒をはじめることにしました。

治郎右衛門　そうか。まあなんでもいい。せっかくやりかけた仕事だから、どこまでもやり通すがいい。

貞行　（うれしそうに、）はい……。（言いにくそうに、）ところで、それについて、おとうさんに少し

治郎右衛門　お願いがあるんですが……。

治郎右衛門　なんだ、貞行。遠慮なく言ってみろ。

貞行　（うち向きかげんに、）今までも、おとうさんにはいろ〳〵御心配をかけてることですから、わたしとしてもまことに言いにくいわけですが、なにしろ新しく養鱒をはじめるとなれば、鱒卵や苗鱒の買い入れから、孵化場の設備から、何からかにからで、相当まとまった資金がいるもんで……。

治郎右衛門　（うなずいて、）うん、そりゃ無理もない。しかし、おまえも知ってる通り、わしにだって別にいらない金があるわけじゃなし……。はて、どうしたもんかな。（と考えこむ。貞行のすまなそうな顔。）

治郎右衛門　こうなればしかたがない。ほかにどこといって金のできるあてもないから、田でも賣ることにしよう。

貞行　（すまなそうに父を見あげて、）おとうさん、こりゃどうも……。

治郎右衛門　（こともなげに笑って、）なあに、心配するな。先祖代々のたいせつな田だが、なにもつまらないことのために手離すんじゃなし、みんなおまえやおまえの仕事のためだ。御先祖様だって、きっと草葉のかげで喜んでくださるだろう。

貞行　おとうさん、まことにどうも……。（貞行は感謝の涙が光る目で父を見あげる。）

湖上　夏の午後。鏡のように澄んで光る湖上を、貞行たちを乗せた舟が進んで行く。

舟の中　舟の中には、日光ますの幼魚を入れたおけを囲んで、貞行と貞時と勝藏。へさきにあお向けにねそべっている貞実。（十六ぐらい。）

貞時　（しゃがんでおけの中をのぞきこみながら、）どうだろう、この元氣のいいこと。全くかわいいもんですね、おとうさん。

貞行　うむ。ことにこりゃあ、おまえが手塩にかけて育てあげたようなもんだからなあ。

貞時　（うれしそうに、）うふふ……。

貞行　（勝藏を見ながら、）やっぱり、なんだな、勝さん。学校にはいってちゃんと勉強した者にはかなわないな。

勝藏　（うなずいて、）全くですね。

貞実　（へさきに身を起して、）おとうさん、ぼくも來年東京の学校にはいるんですか。

貞行　（貞実を見て、）うん、おまえはまあ東京へ行かなくてもいいさ。青森の水産試驗場にはいればいい。

貞実　（うなずいて、）う

勝藏　だんなも、お子さんがたがみんな大きくなって、どんなに心じょうぶでしょうね。

貞行　（満足そうに、）おかげでまあ、これらがみんな一生けんめいわしに手傳ってくれるんで、わしとしてもまことにやりよくなったよ。（勝藏はうなずく。）

貞行　（しみ〴〵と、）それにしても勝さん。月日のたつのは早いもんだな。わしがはじめてこいを放した時は、まだ生まれたばかりだった貞時も、もうこんなに大きくなったからなあ。

勝　藏　ほんとですね。全く早いもんだ。

貞　行　それを思えば、わしらがこう年をとったのも、無理はないな、ははは……。（勝藏も笑う。）

放流　貞行たちは沖合に舟をとめて、清らかな湖中にますの幼魚を放流する。一同ふなべりに立って、感慨深げに湖中をながめる。

貞　時　今度はだいじょうぶでしょうね、おとうさん。

貞　行　うん。どうかまあ、そうあってもらいたいもんだ……。

湖畔　農商務省水産技師松原新之助の一行と貞行が、子の口の湖岸をゆっくり歩いて行く。

松　原　（歩きながらしきりに小首を傾けて、）水温や水質からいっても、えさの豊富な点からいっても、全く十和田湖は、漁場として理想的な條件を備えています。それが昔から一匹の魚もすまなかったというのは一体どういうわけか、実に不思議だと思うが……。

貞　行　先生がたにもおわかりにならないとすれば、こりゃよく〳〵深いわけがあるのでございましょうな。

松　原　しかし、あんたの長年の努力のおかげで、漁場としてりっぱに役立ちうることが証明されたのは、なんといっても大きな收穫です。当局としてもその点では、大いに感謝している次第ですよ。

貞　行　（うれしそうに頭をさげて、）恐れ入ります。

子の口滝　湖水の唯一の落ち口である子の口滝。落ち口の岩頭に立って、幅十丈高さ三丈の大滝に見とれる松原技師の一行。じっと滝を見つめている松原技師の顔に、突然さっと喜びの色が浮かぶ。

松　原　（かたわらの貞行を顧みてうれしそうに大声で、）和井内さん、解けた、解けた。やっと十和田のなぞが解けましたぞ。

貞　行　（不審そうに、）と申しますと……。

松　原　つまり、こんな大きな滝が、湖水の落ち口にある以上、奥入瀬川の魚は、絶対に湖中にさかのぼることができない。昔から、十和田湖に一匹の魚もすまなかったのは、全くそのためですよ。

貞　行　ははあ、なるほどそういうわけでしたか……。（ふたりは笑顔を見あわせる。）

松　原　（ふと氣がついたように、）時に和井内さん。あんたは現在、養鱒をやっているわけですな。

貞　行　はあ、そうです。

松　原　そんなら、こゝに魚道を開いたらどうですか。

貞　行　ははあ、魚道をですな……。

松　原　つまり、十和田湖と奥入瀬川をつなぐ、魚の通い路を作るのです。そうすれば奥入瀬のます、も、自然十和田湖に集まって來る。十和田のますのためにも、発育上たいへんにいいというわけで、一挙両得ですよ。

貞　行　なるほど、そうですか。ではさっそく、そうすることにいたしましょう。

絶壁下　巨岩怪石から成る切り立ったような絶壁の下。すぐかたわらに子の口滝がすさまじい音でどう〳〵と落下している。貞行とつるはしを手にした工夫たち。

鈴　木　（はんてん姿の工夫頭。顔をしかめて、がけを見あげながら、）どうも、だんな。こう岩ばかりのがけじゃ、ちょっとわたしらの手におえそうもありませんな。

貞　行　（事もなげに、）なんだ、いまさらそんな弱音を吐いてもらっちゃ困るじゃないか。なあに、これしきのがけ、お前たちさえその氣になったら、造作もないことだよ。そのかわりわしの方でもあとでそれだけのことはするから、御苦労でもひとつたのむ。

鈴　木　（頭を振りながら、）だんなはそう言うが、どうもこれじゃあなあ……。（工夫たちも、さじを投げたというふうに顔を見あわせる。貞行は思わずむっとするが、すぐに顔色をやわらげる。）

貞　行　（さあらぬ態で、）ははは、さすがのおまえたちでも、たまにゃ遠慮することもあるとみえるな。じゃ、しばらくそこで見物してるがいい。わしが一番やってみせるから。（貞行はかたわらの工夫の手からつるはしを取って、つか〳〵とがけのそばに進む。つるはしを大上段に振りかぶって、えいとばかりに打ちおろす。つるはしは堅い岩にぶつかって、がんとはね返る。貞行は屈せず、満身の力をこめて、一撃また一撃……。顔は紅潮し、汗がひたいににじみ出る。工夫たちは互に顔を見あわせる。鈴木、たまりかねて貞行のそばにかけ寄る。）

鈴　木　だんな、だんな。どうかもうやめてください。あとはわたしらがします。

貞　行　（つるはしを振りかぶったまゝ鈴木を顧み、勝ち誇るように、）どうだ、鈴木さん。やってみればたいしたこともないもんだろう。

鈴　木　（苦笑しながら、）どうもだんなにかゝっちゃかなわない。これじゃどんな難工事でも、わたしらとしてやらないわけに行かないもんな。（工夫たちの方を振り向いて、）さあみんな、はじめろ、はじめろ。（工夫たち、つるはしを手に、ぱら〳〵とがけの下に走り寄る。とゞろく滝の音を破って、高らかにひゞきわたるつるはしの音。汗をふきながら、愉快そうにそのありさまをながめる貞行。）

魚道　絶壁を貫ぬいて、みごとに切り開かれた魚道。清らかな流れの中を、盛んに水上に跳びあがりながら、群れをなして泳ぎくだるます。

湖上　夏の午後。あい変わらず鏡のように澄んで光る湖上。一隻の舟が湖心に浮かんでいる。

舟の中　舟の中に引きあげられた網。網の中では、少しばかりのますがばた〳〵やっている。無言のまゝ、暗い顔でそれを見おろしている貞行・貞時・勝藏・卯之松（かのまつ）の四人。

貞　行　（ため息まじりに、）どうしてこう毎日不りょう続きなんだろうなあ……。

貞　時　どうもこの河ますってのは、一つところにかたまっていないもんだと見えますね、おとうさん。

貞　行　うん、それもあるな。（貞時、ふと、足もとのますに目をつけて手に取りあげる。）

貞　時　（ますをひっくり返して見ながら、）ほら、おとうさん。こいつもだいぶいたんでますよ。これも共食いだな。（勝藏もしゃがんで、いたんだますを見つけ出す。）

勝藏　おや、こいつも……こいつも……。きょうのますは、だいぶいたみが多いですな。

貞行　（むしろやけぎみに）　ふん、てんで不りょう続きの上に、とれたますは、賣物にならないいたみますばかりか、その上せっかく作った魚道からは、どし〳〵川へ逃げて行く。これじゃ全く泣きっつらにはちだ……。（貞時、心配そうに父の顔を見る。）

貞時　困ったもんですね、おとうさん……。（貞行は目をそらし、暗い面持であてどなく湖上を見る。）

湖畔　秋の末の夕方。夕日に赤くはえる湖上。岸に引きあげられた舟のふなべりに腰をかけて、默然と湖上をながめている貞行――深いうれいをこめた目つきやすぐれない顔色、氣の抜けたような力のない態度……。貞時が後方から近づいて來る。貞行は振り向きもしない。貞時は父のそばまで來て、氣づかわしそうに父を見る。

貞時　おとうさん、もうご飯ですよ。

貞行　（あい変わらず湖上を見たまゝ沈んだ声で）　うん、いま行く。（暗い沈默。）

貞時　（やさしくいたわるように）　おとうさん、みんな待っていますから、早く行きましょう。

貞行　うん。（と言って力なく立ちあがる。ふたりは肩を並べて、とぼ〳〵歩いて行く。）

貞行　（うつ向きかげんに低く）　貞時……、さすがのわしも、今度ばかりはすっかり参った……。

貞時　（しいて元氣そうに）　なあに、おとうさん。なにもそうがっかりすることはありませんよ。ことしはだめでも、また來年もあることだし……。

冬　すっかり深い雪に埋めつくされた湖畔。

吹雪（ふぶき）の湖畔　夜。やみの中を荒れ狂う吹雪。夜目にも白く岸に碎ける荒波。

觀湖樓の内部　台所。正月だというのになんの飾りもない。うす暗いランプの光が、ぼんやりあたりを照らしている。烈しい風が窓のあたりをしきりにがた〳〵ゆすぶる。いぶりがちないろりを囲んで貞行とカツ子と貞時。

カツ子　（おどろいて）　そんならおとうさん、あなたは本氣で……。

貞行　（重々しくうなずき、じっと炉の火をみつめながら沈んだ声で）　うん、本氣だ。考えてみれば、行くそろって飢え死にしないとも限らない。しかたがないから今までの仕事は、これっきりよしにして、これから新規まきなおしで、別な仕事にかゝろうと思う。（カツ子と貞時は言うべきことばも知らず、たゞぼんやりとして顔を見あわせる。）

カツ子　（うらめしそうに夫の顔を見あげて）　おとうさんったら……おとうさんったら……いまさらそんなことを言って……。

貞行　（力なく目をしばたたきながら）　そりゃわしとしても、今こゝでやめるのは、どんなにつらいかわからないが、いつまでもあてのない仕事を続けて、この上おまえたちに苦労をかけるのは、わしとしてとてもできないことだからなあ……。（沈默……。いっそう烈しくなりまさる吹雪の音。）

カツ子　（必死の色を浮かべて）　おとうさん。そう言うおとうさんの氣持は、わたしにもよくわかります。でもせっかくこゝまでやって來て、いまさらそんな弱氣を出すのは、日ごろのおとうさん

にも似合わないことじゃありませんか。そりゃ今まではうまく行かなかったけれども、それだからって、もう何もかもすっかりだめときまったわけのものでもなし、これからだってやりようによっては、どううまく行かないともかぎらないじゃありませんか。（貞行は默然とうなだれたまゝである。）

カツ子　（なおも必死になって、）ねえ、おとうさん。せっかく今までやって來たことですもの。家のことが心配ならば、わたしは今までの二倍も三倍も精出して働きます。貞時をはじめ子供たちだって、きっとみんな一生けんめいになって、わたしを助けてくれるでしょう。親子が心を一つにして働けば、万が一にも飢え死にするようなことはないにきまっています。ねえ、おとうさん。この仕事をはじめた時、おとうさんはわたしになんとおっしゃいました。どんなことがあっても、どこ〳〵までもやり通す氣だって、おとうさん、りっぱにおっしゃったじゃありませんか。ねえ、おとうさん。わたしはもうはじめっから、この十和田を死に場所ときめているんです。どんなことがあっても、わたしはこゝを動きたくはありません。（とう言うカツ子の目から、涙がとめどなくぽろ〳〵こぼれ出る。貞時も顏を伏せて、声を忍んで泣いている。）

貞時　（顏をあげ、涙をこぶしでぬぐいながら、）ねえおとうさん。みんなおかあさんの言う通りだ。なあに、おとうさん。もう少しのところだ。もうひとふんばりだ。それまではおかあさんの言う通り、わたしたちみんなして一生けんめいになって働いて、家のことは決しておとうさんに心配はかけません。（貞行は石のように身を堅くしたまゝ、いよ〳〵深くうなだれる。息詰まるような沈默。ものすごい吹雪の音。貞行、突然ぐっと顏をあげ、なんともいえない目つきで、かわるがわる妻と子を見る。）

貞行　（激情にふるえる声で、）そうか。よくわかった、カツ子、貞時…。おまえたちがそう言ってくれれば、わしはどんなにありがたいか…。（熱い涙がはら〳〵と、貞行のやつれたひげづらを傳う。）

貞行　（涙をぬぐおうともせずに、）おまえたちのおかげで、今、はっきり目が覚めた。少しばかりの苦労にへこたれて、いまさら仕事をやめるなどと言ったのは、わしの大きなあやまちだった。安心してくれ、カツ子、貞時。おまえたちさえその氣持なら、もちろんわしはやめはしない。決してやめはしないぞ。（カツ子と貞時の顏には、さっと喜びの色が浮かぶ。）

カツ子　そんならおとうさん。思いなおしてくださいますか。

貞行　（大きくうなずいて、）うん、思い返したとも。もうこうなれば、どんなことがあってもやめはしない。本望をとげるまでは、どこまでもやる。なあに、今までのことは、ほんの序の口だ。なあ、カツ子、貞時。仕事はいよ〳〵これからだぞ。（三人は涙にぬれた笑顏を見あわせて、互に力強くうなずきあう。）

湖畔　やみの中をいよ〳〵荒れ狂う吹雪。ほえたける荒波…。

東北漁業組合本部　明治三十五年の夏。青森市の東北漁業組合本部の質素な應接間。テーブルを囲んで、組合頭取の今詢（こんまと）、貞行、信州寒天製造会社社員中島庸（ようぞう）三の三人。

今詢　（首をひねりながら、）ふうむ。十和田湖のような場所に向く魚といえば、やっぱりますが一番だろうが、かんじんのますがそういうことなら困ったもんだなあ…。

貞　行　（とぼうに暮れたように、）わたしも今までは、できるだけのことはしてみたんですが……。

今　　どうしたもんだろうな。わたしにもさしあたって、かくべついいちえも浮かばないが……。

（貞行はしょんぼりとうなだれる。）

中　島　（何かひとりうなずきながらいすを進めて）和井内さん。お話ちゅうなんですが、今までうかゞったところで、だいたいの様子はわかりました。それにつきまして、私たちも少しばかり思い当たることがあるんですがね……。

貞　行　（力なく顔をあげ、氣の抜けたような声で）はあ……。

中　島　私は仕事の関係上、たび〳〵北海道へ行きますんで、ますのことならいくらか知ってるつもりですが、釧路の阿寒湖の原産で、胆振の支笏湖でおもに養殖されています、アイヌ語でカバチェッポというますがあります。このますは、普通のますより、なりはいくらか小さいが、養殖はごく簡單な上に、共食いの性質もなし、すむには清水が一番適当しています。そればかりでなく、放流後三年めか四年めには、必ずもとの放流場所へ來て產卵するという、たいへん珍しい性質がありますから、漁獲にも非常に便利なわけです。どうもだん〳〵お話をうかゞっていますと、あなたの十和田湖には、このカバチェッポますが一番向いてるのじゃないかと、しろうと考えながら思いますが、一体どんなもんでしょうかな。（この話のうちに、貞行の目はだん〳〵輝きを帶び、面には非常な興味の色が浮かぶ。）

今　　ほう、そういう珍しい性質のますもいるもんかね。わたしははじめて聞いたが……。

貞　行　（せきこんだ調子で）なんと言いましたかな、そのますの名は。

中　島　カバチェッポ。カバチェッポです。なんでも、飛んだり、はねたりするごく元氣のいいやつだそうですよ。姫ますの一種です。

貞　行　（幾度もうなずきながら）ははあ、なるほど。カバチェッポ……カバチェッポですな……。

今　　（いきおいこんだ調子で）どうだ、和井内君。ひとつ、そいつを養殖してみたら……。（貞行は考え深い目つきであらぬ方を凝視しながら、默って大きくうなずく。）

ます　水槽の金網の上で、次第に孵化成長して行くますの卵の生態を、拡大レンズで映し出す。開眼から孵化へ——。まだ孵化しきらずに、卵のからを腹にくっつけたまゝ泳ぐ幼魚。完全に孵化して、実に機敏にはつらつと泳ぎまわる無数の幼魚……。

放流　湖上。水面に傾けられたおけから、水といっしょにどっと吐き出される無数の幼魚の大写し……。舟の中に立って、放流されたますの行く末を、なんともいえない顔つきで見送る貞行たち。

貞　時　（水中を見つめながら）さあ、いよ〳〵あと三年ですね、おとうさん。

貞　行　（重々しくうなずいて）うむ、あと三年だ……。あと三年……。（と、あとの方はまるでひとりごとのように——。）

魚見　孵化場に近く、巨大な立木を利用して作った原始的な高い魚見ばしご。よれ〳〵の着物にひげぼう〳〵の貞行がその上に登って、朝も、晩も、風の日（ひげや着物のすそを烈しい風に吹きまくられながら）も、雨の日（み

のを着、かさをかぶって、も一心不乱に湖上をながめわたす。

魚見　よく晴れた十月のある日の午後。燃えるような紅葉にはえる十和田湖は、人間の苦悩も知らぬげに、あい変わらずさながら「神の庭園」のようにうるわしい。

魚見ばしごの上。目に見えてやせ衰えた貞行が、目ばかりはらん〳〵とすさまじく光らせながら、紅に輝く湖上を一心にあちらこちらながめわたしている。だん〳〵西に傾く日を受けて、ひときわはなやかにいろどられる夕空。それを映して、いよ〳〵うるわしさを増す湖上。ひや〻かな夕風がさっと吹きおろして來て、貞行のみだれた髪を拂い、長くのびた不精ひげを拂う。貞行はうそ寒そうに肩をすくめる。

貞　行　（がっかりしたようにつぶやく、）あゝ、きょうもだめか……。（力なく頭を振り向けて西空を見る。）

つかな夕日が、山頂の原始林の間に光っている。再びなにげなく湖上を見る。何が見えたのか、はっと息をのんで、思わずからだをぐっと前に乗り出す。

湖上　鏡のように澄む湖上の一点が、何かしらざわ〳〵と波立っている。それがだん〳〵岸の方に移動して來る。波の上に盛んに跳びあがる魚の姿。

魚見ばしごの上　貞行は近づく波立ちをながめながら、ぎゅっとからだをこわばらせ、目をはりさけんばかりにかっと見開き、熱い息をはっ〳〵とつく。片手で幾度も目をぬぐう。波立ちはいよ〳〵岸に近づき、銀色のうろこをきら〳〵と夕日にひらめかしながら、盛んに跳びあがるますの姿がはっきり見える。貞行はまるでほえるように「むゝ。」と叫ぶ。いきなり滑り落ちるようにしてはしごからおりる。夢中で波打ちぎわにかけ寄る。

波打ちぎわ　すぐ目の前の水中で、まっくろになってひしめきあうますの大群。あとからあとからと跳びあがるます……。貞行はぼんやりとそのありさまに見とれる。急に身をひるがえして、どん〳〵観湖楼の方へかけ出す。

観湖楼の内部　台所。カツ子がうす暗い流しもとで、夕食のしたくをしている。ふと顔をあげて耳をそばだてる。大声でどなっている夫の声が聞えて來る。カツ子は急いで外に出る。

観湖楼の前　不安げに立つカツ子の前、貞行が目の色を変えて走って來る。

カツ子　どうしたんです、おとうさん。何かあったのですか。

貞　行　（息をはずませながら、どなるように、）カツ子。ますだ、カバチェッポだ。

カツ子　（ぎょうてんして、）えっ、ますだって、おとうさん。

貞　行　（いきなりぐっとカツ子の手首をつかみ、）さ、早くわしといっしょに來い、早く。（ふたりは互に手を取りあったまゝ、ころぶようにしてかけて行く。）

もとの浜べ　貞行とカツ子は、互にひしと寄り添って、声もなくたゞぼんやりと、湖中に躍るますの大群をながめる。

カツ子　（夫を見あげ感動に震える声で、）よかったなあ、おとうさん……よかった……。（あとはことばが続かず、涙がぽろ〳〵とあふれ出るばかり……。貞行の目からも、大粒の涙がとめどなく流れる。）

貞　行　（吸いつけられたようにますの群れをみつめたまゝ、しきりにつばをのみこみながら、うなずきうなずき、）うむ、よかった……よかった。

湖上　明かるい秋の日に輝く湖上。点々と浮かぶ舟。村人たちが舟の中に立ってます網を引きあげる。

浜べ　女や子供たちをまじえた大勢の村人が、かけ声もにぎやかに地引き網を引いている。やつれやせたみんなの顔は、今やあふれるばかりの喜びの色に輝いている。貞行と勝藏が少し離れたところに立って、さも満足そうにそのありさまをながめている。

勝　藏　（しんみりと）貞時さんが、これを見たら、どんなに喜ぶことでしょう、なあ、だんな……。（勝藏はそっとうれし涙をぬぐう。）

貞　行　うん。あれも、あちらから何度も心配した手紙をよこしていたが、わしの知らせを見て、きっと安心したろう。（ふたりはしばらく無言。）

勝　藏　だんな。おかげでみんな助かったって、村の連中は泣いて喜んでます。

貞　行　（満足そうに）そうか……わしだって長らく苦労したかいがあって、こんなうれしいことはない。もうこうなれば、どんなききんがあったって、十和田はだいじょうぶだからなあ。

勝　藏　（頭を振りながらしみ〴〵と）全くありがたいことです。

盆踊り　夜。月の光が明かるい。いきおいよく燃えあがるかゞり火を囲んで、ゆかた姿の村人男女大勢が、楽しそうに踊っている。環の中にはやし方と歌い手。歌い手がにぎやかな笛・太鼓のひゞきに合わせて、声張りあげて鹿角音頭を歌う。踊りの環を囲んで見物する人々。丘の上には、ひのはいった高張りぢょうちんが二つ、木の葉隠れに明かるく浮きあがっている。

浜べ　人けのない浜べ。ゆかた姿の貞時が、ひとり小舟のふなべりに腰をかけて、じっと湖上をながめている。青い月光を浴びて、夢のようにかすむ遠景。静かに岸を洗う波の穂先が、きら〴〵と輝く。盆踊りの歌やはやしが、遠くから流れて來る。ふと人の足音がする。振り向くと、近づいて來る貞行のゆかた姿が、月光の中にほの白く浮かぶ。

貞　時　おとうさんですか。

貞　行　うん。貞時、おまえそこにいたのか。（貞行は貞時のそばに來て立つ。ふたりは黙って湖上を見る。）

貞　時　（しみ〴〵と）やっぱり十和田はいいなあ、おとうさん。

貞　行　（うなずいて）うん、いい。とりわけ今夜の景色はすばらしいな。

貞　時　わたしは向こうで、何度十和田を夢に見たか知れない……。

貞　行　そうだろう……。

貞　時　（急に胸が迫って涙ぐみ）でも、わたしは……おかあさんがかわいそうでたまらない、おとうさん……。

貞　行　（感動を押さえながら、いとしげに貞時を見やって）なあ、貞時。おかあさんもこの世じゃさんざ苦労したが、いつも言ってた通り、とう〳〵十和田の土になった上、今じゃ村の人たちにあがめられているんだ。おかあさん、どんなにあの世で喜んでいるかしれない。（貞時、涙にうるむ目をあげてうなずく。）

貞　行　なくなったおかあさんは、いつまでも、十和田を守ってくれるんだ。おかあさんのことを思

えば、これからもっともっとしっかりやらなければならないぞ、貞時。わしらのほんとうの仕事は、まだ〳〵これからだからな……。（貞時、無言のまゝ力強くうなずく。ふたりはまた默って湖上をながめる。）

貞行　（しみ〴〵とひとりごとのように、）十和田……十和田……。わしも追っつけ、この十和田の土になるんだ……。（貞時、つと立ちあがって父と向かいあう。）

貞時　（はれやかな微笑を浮かべながら、）おとうさん、わたしもだ。（父と子は月光の中で、じっと互の目を見かわす。ふたりの顏には、なんともいえない歡喜と幸福がみなぎる。盆踊りの歌やはやしの音が、なおもにぎやかに流れて來る。）

（疏上俊夫の作による）

國語学習の手引

中等國語二（1）に載せてある教材は、次に掲げた作者の作品によったものである。こゝに記さない教材は、古典ならびに文部省作である。

課名	題目	原作者訳者	原典
一	早春	木下夕爾	
三	短歌と俳句		
	歌ごころ	若山牧水	短歌作法
	俳句への道	富安風生	俳句の作り方
四	文章について	谷崎潤一郎	文章読本
五	わがはいはねこである	夏目漱石	漱石全集
七	舞へ〳〵かたつむり		
	日光	北原白秋	白秋全集
	ひがらとつばき	北原白秋	白秋全集
八	カバチェッボ	麻上俊夫	「日本映画」第七巻第三号

國語学習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行ってほしい。

一　早春

（1）朗読をくふうする。読みの速さや音声の強さや、調子の違いなどによって、朗読による表現を研究する。

（2）この詩にうたわれている情景について、話し合う。また、まとめた感想文を書いてみる。

（3）早春の感じをよく表わしていることばを、拾い出してみる。

（4）自分の土地に即し春に取材した詩を作ってみんなで朗読し、それについて感想を述べ合う。

二　やさしいことばで

（1）やさしいことばを使わなければならないわけを、箇條書きにする。

（2）次の問について考えてみる。

イ、学問上のむずかしい話を、やさしくしなければならないわけは何か。どうしたらやさしくなるか。

ロ、わかりやすいことばには、どういう條件がいるか。話をする時と、文章に書く時と比べて考える。

ハ、「わが心の絵を写し取る」とは、どういうことか。それが、なぜ、「やさしいようで実はむずかしい」のか。

ニ、「白い雲」のたとえは、何を意味しているのか。

（3）お互の作文や、話しことばの実際を取りあげ、もっとわかりやすくできないかどうか、共同研究する。

三　短歌と俳句

（1）歌を作るのはむずかしいことではないというわけを考えてみる。

（2）次の問に答える。

イ、「歌ごころ」とはどんな心か。

ロ、「詠みたいという心」は、どうしたら起るか。その心が起った時はどうするか。

ハ、歌の材料はどこにあるか。材料に心がとまったら、どうするか。

ニ、感興がわきあがった時には、どんな注意がいるか。

ホ、歌を作る上に、手帳・散歩・旅行は、どんな効果があるか。

（3）この文に述べてあるような、すなおな、自然な氣持で短歌を作ってみる。

（4）「季題」とは何か。おもな例を調べて書いておく。

（5）「切れ字」とは何か。この文の説明を読み、なお、他の実例について調べてみる。

（6）俳句の添削のしかたを、説明についてよく読み取る。「力の弱さ、固さ、脆弱性、ことばのひゞき、調べ」などについて考えて、みんなと話し合う。

（7）自然をよく見て、氣持のまゝに、十七字にしてみる。

（8）自分の知っている和歌や俳句について、こゝにいわれていることを、実際に調べてみる。

四　文章について

（1）散文の理想はどんな点にあるかを考える。

（2）現代の文章に、美文は、なぜ役に立たないかを話し合ってみる。

（3）こゝに引用してある志賀直哉の文章は、どういう点がすぐれているか。この文の説明をよく読む。

（4）小学校の國語教科書や、「中等國語」の文について、藝術文であって実用的なわかりよい文章の例を調べる。また、実用文であって藝術的な味のあるものを、他の書物や、新聞などで調

べてみる。

(5) 文章の種類やその発達の歴史を調べる。

(6) 「三　短歌と俳句」を読みなおしてこの文を比較研究してみる。

五　わがはいはねこである

(1) どこがおもしろかったか、みんなで話し合う。

(2) 次の点に注意して読む。

イ、ねこの立場から、人間をどう観察しているか。（書生に対して、おさんに対して、主人に対して。）

ロ、人間に対して、皮肉な批評をしている所はどこか。

ハ、車屋の黒との対話の部分に、「わがはい」の心持、黒の性格が、どう描かれているか、どのことばに表われているか。

(3) 「四　文章について」を思い出して、表現をよく研究してみる。文語が使ってあって、調子のよい所、短い、はぎれのよい文で筆をすゝめて行く所、その他、特別なくふうがしてある所を見出だす。

六　一門の花

(1) むずがしいことばや、わからない事がらを、どう研究したらよいか、その調べ方になれるようにする。

(2) 幾度も読んで、古い文章になれるようにつとめる。

(3) 二つの物語が何を表わしているかを考える。

(4) どこか一部分を、現代語に変えてみる。

(5) 歌の意味をわかりやすく説明できるようにする。

(6) 敬語について調べてみる。（一例「おはしてみたまへば」「立ち寄らせたまへ」）

(7) 「ぞ」「こそ」「候」などの使い方に注意する。

(8) 勅撰集・平家物語・源平盛衰記などについて調べる。

七　舞へ〳〵かたつむり

(1) 一つ〳〵の歌は、何を歌おうとしたものか、それについて考える。

(2) 昔の人の明かるいそぼくな心持は、どのことばによってうかがうことができるか。

(3) 梁塵秘抄の詩と、このあとの二つの詩とを比較してみる。

(4) 童謡や民謡を採集して研究する。

八　カバチェッポ

(1) 話の内容を短いことばで話す。

(2) 全体が幾つの場面からできているかを調べてみる。

(3) 映画でなくては表現できない生き〳〵した所はどこか研究する。
(4) 貞行のせりふだけを、通して読んで行く。その苦心・失敗・成功のうつり行きの中に、この人物の性格を読み取る。それを、ト書きの部分ではどう表わしているかを考える。
(5) カツ子・貞時・その他おもな人物のせりふやしぐさを通して、これらの人物が事件の展開の上に、どういう役をしているかを考える。
(6) 読み取ったことをまとめて箇條書きにしてみる。
(7) 傳記・物語などをシナリオに書いてみる。

24

中等國語
二
(1)

昭和二十二年三月三日印刷　同日飜刻印刷
昭和二十二年三月七日発行　同日飜刻発行
昭和二十三年二月三日修正印刷　同日修正飜刻印刷
昭和二十三年二月七日修正発行　同日修正飜刻発行
〔昭和二十三年二月七日　文部省検査済〕

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE Oct. 21, 1948)

著作権所有
著作兼発行者　文部省
東京都千代田区神田岩本町三番地

飜刻発行者　中等學校教科書株式會社
代表者　阿部眞之助

印刷者　東京都北区稲付町一丁目二〇八番地
二葉印刷株式會社
代表者　大野治輔

発行所　東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

P.T.A.
昭和 年 月 日受入

広島大学図書
0130449815